

也といふ義によれりとみゆ、さらば小帳曰斗之義によりてトバリといひしも、或るべからず、和名鈔に、帳は此間に長といふと注せしは、字の音をもてよぶ也、俗亦讀てタレヌノといふ也、

〔倭訓栞前編六〕かたびら 日本紀倭名鈔に、帷をよめり、傍平の義、ひらばりなどいふが如し、古今集に、帳のかたびらとも見えたり、源氏巴抄に、夏はすゞし、冬はねり也といへり、新撰字鏡に、鋪をもよめり、香壺のはこ、くすりの箱にもかたびらといふ物あり、まさすけに見えたり、

〔玉勝間十一〕ゆかたびら かたびら

浴して著る衣を、俗にゆかたといふは、同じ物語○榮花物語 玉のかざりの巻に、御ゆかたびらとあるこれなり、ついでにいはいはむ、かたびらとは、今の世には布の衣をのみいへども、とさにはあらず、裏なく一重なる物を、何にまれかたびらとはいふなり、

〔類聚名物考調度五〕帷 かたびら 和名抄 幄 帳 幃 帷 幔 帘

幃、徒到反、覆幃、又説文單帳也、爾雅、幃謂之帳、帷者幕也、幔也、在上曰帘、四旁及上曰帷、上下四旁周曰幄、此字注に依て按に、幃帳は總名にて、それを張様の形によりて名のかはるにや、帘はあげばりなり、帷まく也、幄は家の如くに引廻せしをいふ歟、幄のやと云にて、或るべし、

〔古今要覽稿器財〕あげはり帷 幕 幄

帷 古事記、日本紀、孝徳紀、周禮、前漢書 帷は古文圍と通じて、四方にはりまはしたる義なり、周禮の注に、在旁曰帷、又三禮圖に、四旁及上曰帷とあり、また論語非帷裳必殺之を、疏に、在下之裳、其制正幅如帷、名曰帷裳、則無殺縫とときたれば、帷裳などあるも、その幅を堅さまにぬふを以てなるべし、○中略 かたびら

日本紀、傍和名抄、和訓栞云、傍平の義、布衫のことをさいふは、帷に用ゆる布もて衣に、或るべし、論語疏には、正幅如帷、名曰帷裳とあり、二説いづれもいはれあり、

〔令義解職一〕主殿寮